

95年中国女文字調査報告

遠 藤 織 枝

95年9月7日から14日まで、第3回の現地調査を行った。今回は、江華瑶族自治県（以下「江華県」と記す）の女文字の有無の確認と、新しい伝承者を探し出すことを目的とした。昨年調査の際、江永県と東南部で接する江華県に女文字が存在した、との情報を得ていたため、その地での存在の事実を確かめたいと考えたのである。

(1) 江華県の状況

昨年、共同研究者趙麗明氏が江華県の可能性を探りに現地に入り、県民族委員会の鄭徳宏氏から60年代に女文字を見たとの話を聞いてきた。今回もまず鄭氏にその詳細をきくことから始めた。鄭氏の話は次のようなものであった。

◇

63年の民族文字調査のとき女文字を書いた紙を見た。澧墟で調査をした人の資料の中に2枚の女文字資料があった。自分はその文字が読めないの澧墟に住んでいた老女性に読んでもらってIPAの記号をつけた。（少数民族の文字調査の調査員に選ばれて学習班でIPAのつけ方を習った）それを発音して若い瑶族の女性にきいてもらった。彼女はそれで意味がわかる、と言った。書かれていた内容は1枚は情歌で、もう1枚は勸進歌であった。

集めた資料は100万字以上あったが、すべて長沙市の民族委に届けた。これらの資料は文革で焼き捨てられた。

◇

9月8日、鄭さんの話にあった湊壺を訪ねて、鎮政府の役人の案内で鳳尾村の李桂芳さんという83歳の女性に話を聞いた。

◇

女文字は知らない。若いとき歌をうたったことがあるし、ハンカチや花帯（3～4色の糸で織った幅4cm長さ約2mの帯）を作ったことがある。そこに女文字が織り込んであった。歌を織り込んだ布団の側も作った。結交姉妹はしなかった。

◇

母親や自分が織った布団の側をもっている人はこの村には多くいた。30歳の鐘冬英さんも自分で織ったものを見せてくれた。10cm幅ぐらいの細長い帯のようなものを織り、それを15本つなぎ合わせて布団側になっていた。そこに女文字が2字織り込まれていた。それは文字としてというより図案としてのもので、他の図案の中に混在していた。

大路舗郷の2、3の村できいた女性たちも女文字を見たことはないと答えた。自分で織った布団側をもっている女性は多かった。漢字を織り込んだものが多かった。19歳の女性も結婚のときのために織ったという、鮮やかな色の糸で10年ほど前流行した歌の一節を織り込んだ布団用の布を見せてくれた。また、一針一針刺して底を作り、へりに飾りの刺しゅうをほどこした美しい布鞋もみせてくれた。

この地方の女性たちは、刺しゅうや織物が得意で、文字を好んで使うことがうかがわれた。

鄭徳宏さんのほかにも以前女文字を見たことがあるという人がいた。県史編纂室の李本賢さん（59歳）である。李さんの話。

◇

79、80年に民族調査に参加して、資料の分類の仕事をした。そのとき60年代調査のときの女文字の写したものを2、3部みた。

様式の決まった調査用紙3、4枚に写してあった。湊壺で収集した扇子から写したと裏に書いてあった。中国語訳もつけてあった。内容は1つは

「梁山泊と祝英台」、もう1つは結婚する前の姉妹がやりとりした手紙であった。これらは省の档案馆にあると思う。(遠藤注：档案馆とは戸籍簿などを保存し、取り扱う役所。湖南省の档案馆に女文字資料があるかどうか確認していない)

また、82年10月に江永県の档案馆で女文字資料を見た。周碩沂氏が「女書」と言ったから女文字ではないかと思い、その文字を写して北京語言研究所へ送った。同年11月に当研究所から返事がきて、この文字については当研究所の江華県の民族調査団が江華県が瑶族自治县になる前(瑶族自治县になったのは1955年)の調査ですでに発見している、と書かれていた。

◇

その他、鄭さんと60年代と一緒に調査した任俊生さん、奉新朝さん、奉居楚さんに話をきいたが、この人たちは当時女文字資料を見た記憶はないという。

以上江華県の状況をまとめると、50年代60年代に存在した可能性はあるが、現在は存在していないということになる。50年代に存在したのが事実かどうかについて李さんの話の北京語言研究所(現在社会科学院語言研究所)に問い合わせたところ、以下のような回答を得た。

「当研究所に、50年代の女書の資料を手に入れた人はいません。民族研究所の毛宗武氏に問い合わせましたが、毛氏も知らないと言っています。毛氏の手紙を同封します。ご了承ください。 語言所 江藍生 1995.11.8」

同封の毛宗武氏の手紙は次のような内容であった。

「当研究所の前身は1956年に設立された中国科学院少数民族語言研究所で56年前は社会科学院語言研究所の第四組が担当していた。私の知るかぎり、当時第四組には瑶族の言語を調査している人が1人だけいたが、その人は江永県、江華県へは行っていない。56年の全国少数民族言語調査の時、調査班は江永と江華の少数民族地区へ行ったが、“女書”の伝わる漢族の地区へは行かず“女書”と接触していない。今回、問い合わせを受けた後、言語調査

資料の目録を調べてみたが、その方面の資料はなかった。

毛宗武 1995.10.21」

これらの回答から、李本賢さんのいう、北京の社会科学院の言語研究所か民族研究所が50年代に女文字と接触しているという証言を立証することはできなかった。

江華県の女文字については、現存は考えられないが、過去の存在についてはさらに調査の余地が残されている。

(2) 新しい伝承者

94年夏河淵村で出会えた何艶新さんは、その後女文字を練習し、思い出してかなりの数の字が書けるようになっていた。夏のときは、突然のことであり、1文字1文字思い出し確かめながら形も整わない文字を書ってくれたのであったが(図1)、その後手紙のやりとりをしているうちに95年4月美しい文字を書いたハンカチを送ってくれた(図2)。その文字はすでにみた三朝書の文字のように、細い小さい文字で形も整っていた。はじめ何さんが書いたものとは信じられなかった。去年の夏の拙い文字の面影は全くなかった。しかし趙麗明氏の解説により、遠藤が大晦日に手紙をくれてうれしかったという書き出しの文は何さんしか書けないものであったし、何艶新の女文字の署名もさされて、書き手が何さんであることが確かになった。

その間の文字の回復ぶりについて尋ねること、そして書いてくれたハンカチの文字の音韻を知るために読んでもらうこと、この2つの目的で何さん宅を訪ねた。

何さんは去年から体の調子がすぐれず、前日親戚の不幸があって他村へ行って、もどったばかりのことで、あまり詳しくは聞けなかった。何さんの話。

◇

去年遠藤たちが来るまで、全く書いたことがなかった。(趙麗明氏は、『人民日報、海外版』'95.11月12日号に「何艶新は、村に女文字の調査の人がくるようになって、この1、2年思いだして黙々と練習していた」

図1 何艶新さんの女文字 一九九四年八月



図2 何艶新さんが遠藤に送ってくれたハンカチ
1995年3月

と書いている。しかし、昨夏訪ねたときも、今回改めて尋ねたときも、何さんは、昨夏の我々の訪問が娘時代以降はじめて女文字を書いた時だと語っている)

その後体調がすぐれなかったので、あの時陽煥宜さんの所へ習いに行くよう勧められたがそれはできなかった。でも、自分で少しずつ練習してみた。子供のころ歌えた歌は書けるので、歌を思い出して練習した。少し書けるようになって、趙麗明と遠藤にハンカチに書いて送った。今では自分の考えたことばを書くことはできる。

ハンカチの図案は型紙を写したのではなく、自分で初めから書いた。祖母の書いていたものを覚えていたから書ける。暇があったらこの文字と図案を刺しゅうしたいと思っている。絹の布に刺しゅうしたものを祖母にもらったことがあり、とてもきれいだったから、そういうのを思い出して作ってみるつもり。

祖母は、他の人と一緒によく女文字を書いていた。他人に頼まれて書いてあげることもあった。書くと紅い包み（遠藤注：小銭の包み）をもらっていた。

8歳のころから女文字のことは知っていた。10歳から12歳まで習った。祖母は歌を教えてから字を自分の手の平に書いて教えた。習った歌は全部書ける。

解放後、13、4歳のころ自分の家に戻り — 1歳8ヵ月で父を亡くし、母と一緒に母の実家に帰っていた — 学校へ行くようになって、漢字を習い始めた。それ以後女文字を書くことはなかった。



何さんは55歳。解放後、学校教育を受けた世代で、女文字を女性同士のコミュニケーションに使った世代ではない。その意味で陽さんのような伝承者とは質が異なる。しかし、思い出しながらにせよ、自分の考えることばが表記できることは、女文字の伝承者として貴重な存在である。女文字の寿命をのばしうる人である。

その他の新しい伝承者と資料を求めて、わずかな手がかりでもあれば、その中に出てきた地名、人名を頼りにどこへでも足を運んだ。江華県の大干という江永県と西北部で接する地方を訪ねたとき、江永県の松柏でみたことがある、松柏の西榛尾村にいるある高齢の女性が書けるはず、などの情報を得ていた。また、かつて女文字伝播の中心地とされた江永県上江墟郷上江墟で出会った老女性に厩子舗に95歳の老女性がいて、その人は女文字をよく知っている、とも聞いた。

上江墟の近くの楊家村では、3人の女性が女文字を書いたハンカチを見た

ことがあったりかつて持っていたりした、以前甫尾村によく書ける人がいた、というので名前をきくと高銀仙さんという。高さんは91年に亡くなっているが、趙麗明氏にたくさんの資料を提供して趙氏の女文字研究の協力者として功績のあった女性である。

隣の高家村は、昨夏の調査の際美しい文字の三朝書が出てきた村で、まだ他にも残っている可能性があるかと期待して訪ねた。ここでも高銀仙のことを知っている女性、母が三朝書をもっているのを見たことがあるという女性、母はたくさんもっていた、母の実家は錦江村だったという女性もいた。

その錦江村へも訪ねた。陽煥宜さんに女文字を教えた義早早さんのことを知っている人がいた。何建雪さん（65歳）で、何さんによると、姉が結婚するとき、義早早に三朝書を書いてもらった。義早早は30歳以上で、たくさん書いて忙しかった。1枚のハンカチを頼むと銅銭3つか4つ払った、という。

何さん自身は女文字の読み書きはできないが、道県龍眼塘の娘々廟へは娘時代いつも行っていた。そこへ行くと女文字を書いた扇子を2本もらい、前年にもらったのを納めた、納めた扇子は翌日全部焼却された、とも話してくれた。

扇子舗でも、三朝書を見たことがあるという男性がいた。その52歳の男性は文革のとき紅衛兵だったから、三朝書もハンカチもたくさん集めて焼いた、とのこと。今まで、文革でもっていかれた、焼かれた、という話はきいていたが、焼いたという証言は今回はじめて得たものである。

松柏郷の西榛尾村で会った66歳の女性は、結婚する前に三朝書を持っていたが、解放後古いものはいらないと思って捨てた、と言い、64歳の別の女性は、自分は持っていないが、持っている人を見たことはある、と言った。

黄甲嶺郷の黄甲嶺村で会った谷母溪出身の67歳の女性は、母のものを持っていたがなくなった、と言った。見本を示しながら高齢の女性に尋ねていると、通りかかった一人の男性が、自分の妹の姑は上江壩の出身でその文字が書ける、と教えてくれた。その人にぜひ会わせてほしいと頼んで、その姑の住む杏菊村へ案内してもらった。

その姑さんは盧閩池さん（79歳）だった。盧さんに案内の政府の役人が、これを見たことがあるかと三朝書の見本を手渡した。盧さん、受け取るなり上下の向きをかえた。その文字を凝視し、上から順にいくつかの文字を指さし「この字知ってる、これ読める」と大声で叫んだ。そして「マー」「ツァー」「モー」と読んでいった「この字はノー、この字はナー、この字は…」と1文字1文字指さして読んだ。ときどき、「ああもう忘れてしまった」「50年ぶりだ」「この字はこれと同じだ」などと文字についての思いをつぶやく。そのうち、これは義早早の字だ、とまで言う。

女文字で書いた歌を何か歌えるかときくと、これまた朗々と歌いだした。「梁山泊と祝英台」という、女文字資料によく出てくる悲劇の歌である。よどみなくすらすらと一気に歌ってくれて、外部の者が珍しくて集まってきた人々からも拍手が起こったほどであった。以下は盧さんにきいた話である。



女文字は13歳のときから3～4年習い、そのころは全部書けた。田広洞のシューシューという女性から習った（遠藤注：盧さんは漢字を知らないなので、音しか記せない）6～7年間書いたと思う。習うのは楽しかった。習うときは、1冊の本か扇子、1枚の紙など1つのまとまったものを全部覚えると次へ移るというやり方だった。何字ぐらい習ったかわからない。

結交姉妹が7人いた。7人一緒にならって2人だけが書けるようになった。

娘々廟で扇子をもらってきて家に帰ってそれを見て書いた。次に行くときそれを持って行って納めた。

19歳で結婚した。結婚のとき歌をうたった。家にいるときはよく歌った。結婚後、苦しみや悲しみが多くて歌わなくなった。

結婚するとき実家にたくさんあった三朝書の1冊だけ持ってきた。三朝書も作ったことがある。持っていた三朝書は、息子が軍隊から帰って、古いものだからといって捨てた。



陽煥宜さんが女文字で書いたハンカチをみて、この絵はまだ完成していない、味がない、心がこもっていない、と批評した。確かに陽さんは86歳、北京へ持って行くために急いで作ったもので、それほど細かい所まで正確には描いていなかった。

それにしても、この文字の書き手を義早早と確信をもって言い、陽さんの図案を批評するには、それだけの女文字の知識の持ち主でなければならないはず。盧さんの女文字習得は確かなものであったろう。これをきっかけに思い出してほしいと、盧さんに見せた三朝書とハンカチをコピーし、紙とサインペンを置いてきた。

盧さんが女文字をみたときの興奮ぶりと、話をきく間ずっと文字を指でさすっていた懐かしそうな様子から、女文字が盧さんにとっていかに親しく愛着のあるものであるかがよくわかった。この地の女性たちにとって女文字が単なるコミュニケーションの手段ではなく、それを眺めたり書いたりすると自体に価値のある存在であったことが確認できた。

盧さんは今は一人暮らし。夫と息子に死別し、息子の妻（案内してくれた男性の妹）は出かせぎに広州へ行っているという。貧しく淋しい盧さんの晩年に、女文字が少しでも彩りを加えることができるとすれば、これこそ女文字の本来の効用の再現といえよう。盧さんが女文字をどのくらい思い出しているか、何さんのように女文字を取り戻しているかどうか、また調査の課題が増えてきた。